

今日の日本が直面する憲法、安全保障、教育をはじめとする国家的課題に取り組み、日本再生に向けた活動を行っている民間シンクタンクの公益財団法人「国家基本問題研究所」（櫻井よしこ理事長）が外国人による優れた「国基研 日本研究賞」の受賞者が選出された。

「地道な研究 事実を客観的に」



写真が外国人による優れた日韓併合期に日本人は何を見「国基研 日本研究賞」の受賞者が出された。

「国基研 日本研究賞」に米最高賞の「日本研究賞」に米ハーバード大学教授のジョン・

マーク・ラムザイヤー氏、「特別賞」に東京都立大学名誉教授の鄭大均氏が選ばれた。それぞれの著作「慰安婦性奴隷説をラムザイヤー教授が完全論破」（ハート出版）と「隣国の発見（ハート出版）」と「隣国の発見（ハート出版）」に高く評価された。

で、慰安婦は強制連行でなかったという事実を客観的に示した。発表後に米国の学会から迫害を受けたのは、ルーズベルト米大統領の戦争責任を示し、同じく迫害を受けた歴史学者、チャールズ・A・ピアード氏に通じるものがある」と高く評価した。

特別賞の鄭氏については「日韓併合期のいゝところも悪いところも含め、当時の様子を公正に描いている。日本に対しても善意を持ち、韓国に対しても愛情のある視点を持った、美しく

公平な内容がすばらしい」と称賛した。

■選考委員会

櫻井よしこ・国家基本問題研究所理事長（委員長）

田久保忠衛・国基研副理事長、杏林大学名誉教授（副委員長）

伊藤隆・東京大学名誉教授

平川祐弘・東京大学名誉教授

渡辺利夫・拓殖大学顧問

高池勝彦・国基研副理事長、弁護士

来月11日に記念講演会

第11回「国基研 日本研究賞」に選ばれたラムザイヤー教授の授賞式と記念講演会が開かれます。参加申し込みは以下の通り。

日時 7月11日(木)午前11時15分～午後1時15分(開場午前11時)

場所 イイノカンファレンスセンター(東京都千代田区内幸町2の1の1 飯野ビル4階)

会費 3000円(一般)、1000円(国基研会員)。当日会場での申し込みはできません(事前振込制)。

申し込み方法 【記念講演会参加希望】と明記の上、氏名(国基研会員は会員番号も記入)、郵便番号、住所、電話番号を記載し、はがきもしくはFAXでお申し込みください。振込用紙を発送します。定員100人。応募者多数のときは抽選。6月17日(月)必着。

〒102-0093 東京都千代田区平河町2の6の1 平河町ビル5階 国家基本問題研究所S係 FAX03・3222・7821

国家基本問題研究所 第11回「国基研 日本研究賞」に2氏

法と経済学が専門のラムザイヤー氏は、戦前の日本で行われていた貸付金を伴う年季奉公契約を探究し、「売春宿への身売り」という悲しい就業で、この契約が特に機能していたと分析する。

貸付金の存在は、苦界のつらさと世間からの汚名を背負う女性にとって「他のどんな職業より確実に高い収入が得られるという保証」となる一方、甘言と疑われがちな業者にとっても「約束に信用性をもたせる」という効果があった。同氏は、これをゲーム理論の「信用できるコミットメント」に合致すると論じた。

受賞作「慰安婦性奴隷説をラムザイヤー教授が完全論破」は、大きく3つの柱で構成されている。

まず公娼制度と年季奉公契約を論じ、2つ目で国内や日本統治下の朝鮮での慰安婦募集が、同じ方法で行われたと結論づけた。リスクが高い戦地に赴く女性の年季は、通常(国内6年、朝鮮3年)よりも短い2年とするなど、厳格な契約だったとしている。

ハーバード大学教授

ジョン・マーク・ラムザイヤー氏

同氏は、行政が業者に示した契約書のサンプル、働いていた女性の年齢構成、客の動向、花代の分配方法や女性の収入実態、トラブルで生じた訴訟記録、当時の新聞記事など、多様なデータを分析し、契約内容との整合性を裏付けた。

歴史認識や政治的な立ち位置に左右されかねない慰安婦問題を、雇用契約に焦点を絞り、冷静に論証している。その手法から、貧しさや戦乱の時代を究極の選択で生き抜いた女性たちの人格を尊重する、著者

日本研究賞



1954年、米シカゴ生まれ。宣教師の父の仕事の関係で来日、18歳まで日本在住。宮崎県で地元の小学校教育を受けた。ミシガン大で修士、ハーバード大で法学博士号を取得。92年、東京大で教壇に立つたほか、一橋大、早稲田大、テルアビブ大などでも教鞭を執った。カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)、シカゴ大を経て、98年からハーバード大で「三菱日本法学教授」の肩書を持つ。平成30年、旭日中綬章受章。主な著書に『法と経済学 日本法の経済分析』(弘文堂)など。

慰安婦問題 雇用契約から冷静に論証

の真摯な姿勢が感じられた。

だが、2020年末に論文が学会誌に掲載され、脚光を浴びると、左派が大勢を占める米国の歴史研究者から激しい攻撃を受けることになる。まっとうな論争ではなく、論文の削除要求など「異論」を抹殺し、「言論の多様性を認めよう」としないものだった。

本書の3つ目の柱は、こうした被害の報告とラムザイヤー氏の回答だ。研究者らは、吉田清治氏による強制連行説の捏造、これに基づく報道を重ねた朝日新聞が誤報を認めたことなど、慰安婦問題の基本すら無視している。

ラムザイヤー氏は本書で慰安婦の本質に加え、米国の学術界を支配する、あまりに危うい現状を赤裸々に伝えている。

真実の追究は学者の仕事

「受賞の言葉」『真実』の追究は学者の仕事です。そして、慰安婦に関する真実は簡単です。彼女らは、強制的に連行された者ではなかったし、性奴隷でもなかったのです。にもかかわらず、この歴史を短い論文に書いたら、欧米の日本史専門学者にとっては聞きたくない歴史だったのです。彼らは、ジャーナルに論文を撤回するよう請求し、ハーバード大に僕を罰するための運動を行いました。苦労は3年間も続きました。

それにもかかわらず研究をすることができたのは「単に本当のことを言っただけだから、謝っちゃだめだよ」「正しいことは、正しいことだと言えはいんだ」と力強く支持してくださった友人と支えてくれた家族のおかげです。これからも学者として研究にも尽力するつもりですので、今後とも、よろしくお願ひ申し上げます。

《講評》高池勝彦・国基研副理事長

本書は、慰安婦に関する著者の4つの論文を編訳者がまとめ、著者による経過説明、補充論文を加えたものを解説、翻訳したものである。著者は朝日新聞が後に誤報と認めた吉田清治氏の朝鮮人強制連行説に関心をもち、慰安婦が年季奉公契約に類似した契約を結んでいたことを突き止めて論文にした。だが、令和3年1月、産経新聞にその主張が掲載されると、直後から米国で著者に対する殺人予告などの人身攻撃が始まった。著者は誠実に学問的に反論したが、受け入れられなかった。国際的には性奴隷説がまだ広く行われていた。本書を読めば、米国における全体主義的な風潮と、それに対する学問的良心とはどのようなかを理解することができる。

東京都立大学名誉教授 鄭大均氏

特別賞

国の現在・未来を考える上では「過去から」「外から」といった視点を加えることが重要だ。しかし、韓国については、日韓併合期(1910~45年)に現地を見聞した日本人による視点は、「侵略者性」ゆえ、無視あるいは遠ざけられてきたという。

日韓関係が専門の東京都立大学名誉教授、鄭大均氏の『隣国の発見 日韓併合期に日本人は何を見たか』には、そうした事情からあまり目に触れることがなかった、当時の日本人が記した朝鮮の生活や自然、文化に関する優れたエッセーが多数紹介されている。

谷崎潤一郎のような著名な作家だけでなく、政治家、経済人、学者、芸術家…と、集めた作品の数と幅広さに氏の地道で誠実な姿勢が表れている。それぞれのエッセーが当時の朝鮮の風物を鮮やかに浮かび上がらせてくれ、時空を超えて当時の現地を訪れているような気持ちになる。

中でも、第一高等学校長や学習院長を務めた哲学者、安倍能成の朝鮮エッセーの紹介と、あまり知られていない電気生理学者、狭間文一を発掘し、その業績・エッセーを読者に披露した部分は圧巻だ。

安倍の文章に対しては「侵略者性」を主張する一部の研究者から、自身の朝鮮人との接触に欠け、深い洞察がないといった趣旨の批判があるが、当時の京城の風景を季節感豊かに伝える筆力からは、批判が過剰であることがよく分かる。



1948年、若手県生まれ。立教大とUCLAで学ぶ。81年から14年間、韓国の東亜大、啓明大などで教鞭をとり、95年から18年間、東京都立大学文学部に所属。主要著書に『日本(イルボン)のイメージ』『在日の耐えられない軽さ』(いずれも中公新書)『在日・強制連行の神話』(文春新書)『韓国のナショナルリズム』(岩波現代文庫)『韓国が「反日」をやめる日は来るのか』(新人物往來社)など。

エッセーから顧みる当時の朝鮮

挟間については、1938年のノール生理学・医学賞の候補だったことが明らかになっているが、現地で秋に現れるホタルに興味を持ち、その発光の研究とともに、科学者の視点と詩情とが融合したエッセーは実に魅力的だ。

人間像を深く伝えるため挟間の遺族にも取材するなど、「労作」の形がふさわしい一冊といえる。

全冊出版へまたとない喜び

《受賞の言葉》私は日韓関係がいまなお日本統治期の「歴史」に拘束されていることに強い不満を覚える。日本による朝鮮統治は一般的に「抑圧」や「収奪」の歴史として語られ、日韓はそれを前提にして「加害者」もしくは「被害者」として振るまうことが期待されている。日本統治期のイメージを修復する作業も必要であろう。私がエッセーに注目するのは、それが人々の思考や感情にインパクトを与える力があると考えるからである。

日本人は自然やモノに独特の感性を示す一方、普遍的な理念や観念には相対的に無関心であり、見慣れぬ人々に出会うと尻込みしてしまう。そんな変わり者の日本人が朝鮮人を支配した時代であったのだから、興味深くないはずがない。本書は4冊ほどの著書の1冊目当たる。もう少し話題にならないと、全部を出版することはできないかもしれない。その意味で受賞はうれしく、またとない喜びです。

《講評》平川祐弘・東京大学名誉教授

鄭氏は、昨今の反韓気分に乗じて隣国の悪口を言いつける日本論壇の執筆者をたしなめる知性の持ち主です。本書では、日韓併合期にも朝鮮の山河や文化を肯定的に語った谷崎潤一郎、柳宗悦、安倍能成、浅川巧らがいいたことをその文章を引くことで示しました。鄭氏は「独立後の韓国が戦前の時代を抑圧、収奪、抵抗の物語として語り続けること」に不安と不満を覚えたとし、加害・被害者史観を脱却した複眼の見方を示しています。日韓関係の難題は、日本人がかつて半島から与えられたこと、また与えたことを意図的に無視する風潮が戦後、両国で続いたからだという鄭氏の指摘こそ正論と言えましよう。